

# 第9回「日本語大賞」

テーマ「ちょっと気になる日本語」

一般の部 文部科学大臣賞 受賞作品

実るほど 頭を垂れる 稲穂かな

大分県  
工藤 可絵

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

新卒で就職活動をしたのは、一九九六年から消費税が五パーセントになった一九九七年にかけてでした。大手金融機関が次々と破綻するなど景気が急速に冷え込んだ年で、企業の採用抑制があり、非常に厳しい就職戦線となりました。一つ下の学年の就職活動が始まり、求人情報も目に見えて少なくなってきた一九九七年九月、ある企業から内定の連絡を頂きました。一年以上活動し、ようやく手にした一通の内定通知に、やっとこれで就職活動を終えることができるかと胸を撫でおろしたのです。その晩、母に電話し、報告しました。

「お母さん、来年の春からこの企業にお世話になろうと思う」

「よかったわね。安心したわ。いよいよ社会人ね。可絵ちゃん、これを覚えておきなさい。」

『実るほど 頭を垂れる 稲穂かな』よ

その言葉を聞いた瞬間に、私の胸には母への反抗心のような感情がむくむくと湧いてきました。その言葉の意味をなんとなくわからなかったけれど、稲穂が垂れ下がっている情景と、頭を下げて相手に聞き入れてもらう姿がイメージされたのです。その姿は美しく感じられませんでした。お母さんだって、そんな姿を見せたことがないのに……。声なき憤りがありました。

母は当時、大手保険会社で営業をしていました。営業支社の中でもトップセールスレディとして、いつも輝かしい数字をあげていました。保険の営業で成績をあげることがどれほど難しいかを全く理解していなかった私は、働く母を好ましく思っていませんでした。いつも家に母がいないことが、子供の時から淋しかったからです。そんな母から贈られた言葉を素直に受け取ることも、母の気持ちを汲み取ることも、当時の私にはできませんでした。絶対に母のようにはなるまいと心に誓い、社会人一年目を歩み始めたのです。

それから二十年の歳月が経ちました。新卒で入社した企業を退職し、東京から地元九州へ戻ってきました。水田に囲まれた田舎で、両親と静かに暮らすようになって一年になります。

庭に鮮やかな緋色の彼岸花が咲いた九月のある日、母は自宅のリビングで倒れていました。発見が早く、救急搬送も迅速で、すぐに大きな手術を受けることができ、一命を取りとめました。しかしながら、その日から母は人工呼吸器につながれ、集中治療室で目を一度も開けることなく眠っています。九月にしてはちよつと寒い日のことでした。

あの元気な洋子さん（母）が!? 誰もが言葉を失い、驚きを隠せませんでした。

母の人生のシナリオはこうなっていたのか……。母を発見する二時間前まで、いつもと変わらない会話を母としていた私でさえ、そんなシナリオが待っていたとは予想だにしませんでした。しかし、球根を植えた訳でもないのに、きまって暦通りに、土の中からシュッと長い茎を伸ばし咲く彼岸花のように、その出来事は起こるようになっていたのだと感じられたのです。

その日から病院に通う日々が始まりました。一日一回、十分間の面会。母にしてあげられることはほとんどなく、病院にお任せするしかありません。面会時間の間だけ、大きく浮腫んだ母の両手や両足をさすってあげることくらいです。父と私は、母が心配しないように、日々をつつがなく過ごすこと、いや、むしろ以前よりも、より一層丁寧に暮らすことを心がけるようになりました。

母が倒れた翌朝、私は目覚めた時に、ああよかったとホッとするような喜ばしい感情で満たされました。自然と目覚めること、心臓が動いていること、呼吸していること。例えようもない感謝の念が沸き起り、震えたのです。自分の意思をはるかに超えた、何かしらに生かされているのだと感じました。そして、その日一日を終える時、何事もなく眠りにつけることに、ああよかったと安堵し、翌朝もまた目覚めますようにと祈りながら、眠りに落ちました。それは私の感覚と意識ではありませんでしたが、とりもなおさず、母の体のことでもありました。そうか、私たちは祈りの中で日々生かされているのだ。そう思えたのです。

母が入院したことを知った、保険の営業をしていた当時からお付き合いのある多くの方々が、母の容態を心配し連絡をくださいました。毎日意識が回復するように祈り続けていますよ、と仰ってくださいる方もいます。そういえば母は、そのような方々に病氣や怪我、事故、お悔やみ事、お祝い事などがあるたびに、飛んで行って、見舞ったり、買い物などのお手伝いをしたり、お祝いの贈り物をしたりしてきました。時には、お通夜やお葬式、結婚式に参列することもありました。人の人生の大きな出来事に寄り添ってきた母です。その方々のご家族の保険まで契約していただけるたびに、母は恐れ入りますと、自然に頭が下がる想いだったのだらうと思います。母の営業成績は、時には頭を下げることもあったかもしれませんが、その方々とのご縁や信頼が結実した結果としてあらわれる数字だったのです。

稲は、八月下旬に出穂<sup>しちゅうすい</sup>し、それまで青々と濃い緑色だった水田は、黄緑色に変わります。小さな白い花が咲き、受粉が終わると、稲穂の籾は日ごとに膨らみ、やがて稲は黄色く色づきます。そして、籾の重みで自然と稲穂の穂先が垂れ下がるようになるのです。稲の成長を毎日見ていた私は、ふと母の言葉が思い出されました。

『実るほど 頭を垂れる 稲穂かな』

あの日母が贈ってくれた言葉には、母の祈りが込められていたにちがいありません。社会に出て、たくさんの人にお世話になり、教えてもらい、育ててもらうことになる娘に対して、娘がお世話になった方々へ感謝の気持ちと敬意を表することを忘れないようにとの、母なりの社会で働く女性からの祈りのこもったアドバイスだったのです。

十月に入ると、太陽の光を浴びて金色に輝く美しい水田へと変わり、稲刈りが始まります。今年には雨や雷が多く、猛暑日も続き、台風も通過するなど、稲にとつて過酷な夏となりました。幸いなことに、暴風が吹いても稲は倒れることなく、実りを迎えています。高く澄んだ青空の下、爽やかな風が田園を吹き抜け、サヤサヤと葉ずれの音をさせて揺れる稲。稲の穂

先が垂れる景色を見るにつけ、母の意識が回復することを祈るばかりです。母が贈ってくれた言葉はずっと心にひっかかったままでした。母が目覚めて、言葉を交わせるようになったら、母が込めてくれた祈りについて、話してみようと思います。あの日、憤りを感じた娘を母は笑ってくれるでしょうか。